

# 哲學研究

第二百五十四號

第二十二卷  
第五冊

## 實踐と對象認識（承前）

——歷史的世界に於ての認識の立場——

西田幾多郎

### 四

私は最初に知るといふことは、意識の立場から、映すとか認識主觀の綜合統一とかいふことではなく、我々が此世界に於てあり、此世界に於て働くといふことから考へられなければならないと云つた。知るといふことも、働くことでもなければならぬ。而して制作でない行爲とか實踐とかいふものはない。行爲とか實踐とか云ふのは、歷史的世界を變ずることではなければならない、逆に歷史的世界が自己自身を變ずることではなければならない。然らざれば、行爲とか實踐とか云つても、意識に於て然思ふか、さなくば所謂自然の運動といふ如きものに過ぎない。

現實に於て生ずるものは既に有つたものでなければならぬ。無より有は生ぜない。併しそれは

現實に於て實驗せられるかぎり、有つたものであるのである。而もそれは從來の因果律によつて考へられる様に、潜在が顯現に先立ち、顯現と否とに關せず、物が潜在的に存在するといふことではない。然考へるのは、今日の物理學の考へ方でもない。ヨルダンは、量子力學に於て物理の法則が統計學的だと云ふのは、古典物理學に於て骰子遊を考へた場合と同一ではない、自然そのものに於て或決定の成行が豫め定まつてゐないのであると云つて居る (D. H. D. の)。ラプラスの精神といふものがあつても、豫知することはできない。實驗を離れて、單なる外界といふものがあるのでない。併しそれは實在を主觀的に見るといふのではない。却つてその逆である。實驗といふものが補足的に實在に入つて居るのである。そこに私は實在の古い考へ方と新しい考へ方との相違があると思ふ。外に我に對するものは、却つて主觀的世界である。眞の客觀的實在界は我々が之に於てある世界、我々を包む世界でなければならぬ、我々の主觀的作用といふものが補足的である世界でなければならぬ。私は今日の量子力學によつて、物理學が物理學的世界の眞實に觸れ得たのではないかと思ふ。而してそれは所謂自然的實在といふものではなくして、却つて歴史的實在といふべきものでなければならぬ。私が物理的世界を歴史的世界から考へるのは、之によるのである。

右の如き世界は現在に無限の過去未來が同時存在的と考へられる世界、時間が空間的な世界でなければならぬ、行爲に於て、我々は絶對に觸れると考へられる世界でなければならぬ。それは

逆に現在に於ての私の行爲が、私といふものの單なる主觀的作用ではなく、辯證法的世界の自己限定として世界的出來事の性質を有つたものでなければならぬ。私がこれまで直線的なるものが圓環的、圓環的なるものが直線的と云つた様に、歴史的實在の世界に於ては、時間と空間とが相互補足的でなければならぬ。量子力學的な見方は、すべての歴史的實在について云はれなければならぬ。かゝる矛盾の自己同一として、物が形作られる、我々は行爲的直觀的に形を見るのである。

歴史的物が主觀的・客觀的、客觀的・主觀的なるのは、之に由るのである。歴史的實在として社會といふものの成立に於ても、主と客とが相互補足的でなければならぬ。單に時間的な歴史的實在といふものもなければ、單に空間的な歴史的實在といふものもない。右の如き立場から見て、自然の出來事と考へられるものと社會的出來事と考へられるものと、その根柢に於て性質を同じくするものがあるのである（無論兩者を無造作に一つに考へるのではないが）。而して此の如き矛盾の自己同一は、上に云つた如く、現在に過去未來が同時存在的であり、現在が現在自身を限定するといふことではなければならない。現在が矛盾の自己同一として（時間と空間との）、自己矛盾的に自己自身を形成し行く、即ち現在は何處までも限定せられたものでありながら、その事自身が自己矛盾として、いつも自己自身を否定し、自己自身を形作り行くのである。創造といふことは、無から有が出るといふことではない、絶對に決定せられたものが決定するものであるといふことでなければならぬ。

ない。單に人間の歴史のみならず自然をも含めた世界歴史の進行は、右の如きものでなければならぬ。かゝる世界の要素として、我々は制作的であるのである。

單なる唯物論者の立場からも、單なる觀念論者の立場からも、制作といふものは考へられない。然るに歴史的世界は人間活動の舞臺でなければならぬ。之を否定すれば、歴史的世界といふものはない。併し歴史は人間の作爲するものと云ふのではない。自由の傍に必然が存続せなければならぬ。上に引用した如く、ランケは云ふ。形作られたものに於て必然がある。形作られたものと形作るものとが一つの聯關を構成して居ると。かゝる聯關が歴史の必然である（歴史的自然といふものが考へられる所以である）。我々は家を造る。アリストテレスは形相は大工の頭の中にあると云ふ。併し形相は大工の頭の中にあるのではない。大工が技術的に家を構成するのは、歴史的自然の働きに依らなければならぬ。大工の技術的身體といふものは、歴史の世界から生れるものである。技術なき觀念は何物をも造ることはできない。生物にあつては、形相が質料の中にあると考へられる。併し生物的身體の構成といふものは、技術的でなければならぬ。既に辯證法的自己同一としての形成作用的でなければならぬ。我々の制作が歴史的自然の立場（辯證法的自己同一の立場）から考へられねばならぬ様に、生物的身體的構成もその立場から考へられなければならない。唯我々の制作と生物の身體的構成との異なる所は、生物に於ては種が自己自身を形作る、生物は種の奴隸であ

る。之に反し我々も無論種の個であり、我々の行動も種的ではあるが、我々の制作は自由と考へられる。主觀的と考へられる所以である。併し此處に歴史的世界といふものを考へるならば、我々人間の行動といふものも、その外にあるのではなく、矛盾の自己同一として却つて歴史的世界の具體的自己實現といふべきものでなければならぬ。歴史的世界に於ては、夢も實在的意義を有するのである。生物的身體的生命といふのは、逆にかゝる立場から固定せる種の形成と見るべきであると思ふ。何れを基とするかは、世界をその根柢に於て辯證法的と見るか物質的と見るかによつて異なるのである。我々の制作は自由であるとか主觀的であるとか云つても、それは先づ身體的でなければならぬ。その上道具を有たなければならぬ、技術的でなければならぬ。而して成るか否かは、意識の能くする所ではない。我々は何處までも物に従はなければならぬ。我は何處までも物とならなければならぬ。かゝる極限に於て制作が成立するのである。そこに歴史的自然といふものが考へられるのである。制作といふには固より意識的でなければならぬが、その意識的意圖そのものが亦歴史的世界から起るものでなければならぬ。歴史的生命の要求として生起するものでなければならぬ。そこにも我々の意識を越えて自然と考へられるものがあるのである。併しそれは唯客觀から客觀へといふことではない。それでは制作といふものはない。主觀と客觀、我と物とは何處までも對立するものでありながら、我々の作用が我々を否定するものから起つて、我々を否定す

るものを否定する。それが制作であるのである。制作とは、矛盾の自己同一として、現實が現實自身を形作ることである、辯證法的世界の自己限定といふことでなければならぬ。我々の作用が何處までも我々を否定するものから出でて、何處までも我々を否定するものを否定するかぎり、我々の制作は客觀的と考へられる、歴史的自然的と考へられる。現れたものは、單なる自己の作爲ではなくして、歴史的自然的の自己形成なるが故である。かゝる場合、實踐によつて物の世界を映すとも考へられる。併しそれは古典的物理学で考へられる様に、主觀的作用を離れて單なる外界といふものがあると云ふことではない。現れたものが歴史的生命的の身體であるのである、その表現的形成であるのである。かゝる意味に於て、絶對の否定から出でて、絶對に否定するものを否定すると考へられるものが、理性的である。併し我々は絶對否定から出立することはできない。我々はいつも與へられた現實から出立するのである。現實は何處までも形作られたものであり、與へられたものでありながら、何處までも自己を越え自己を形作り行く。我々は現實に於て觸れることのできない絶對に觸れて居るのである。

制作といふことは、絶對に我々を否定するものから出でて、我々を否定するものを否定するといふことである。それは所謂自然から出でて自然に返るとか、無意識から出でて又無意識に入るといふ如きことではない。却つてその逆である。又それは同一哲學の同一と混同せられてはならない。同

一哲學の同一といふのは、かゝる立場からその非辯證法的方向に考へられるものである。現實は何處までも決定せられたものでなければならぬ。現實に現れるものは既に有つたものでなければならぬ。それは何處までも我々の作用を否定するものでなければならぬ（それを普通に對象界とか實在界とか考へて居るものである）。然るに現實は自己自身を否定して自ら動くものでなければならぬ。現實は創造的でなければならぬ。そこに現實の現實たる所以のものがあるのである。而してそれは現在に無限の過去未來が同時存在的であるといふことである。之を決定せるものと見れば、何處までも決定せるものでなければならぬ。之を決定せざるものと見れば、何處までも決定せざるものでなければならぬ。かゝる辯證法的自己同一が現在と考へられるものである。故に現實は上に云つた如く動搖的である。そこに現實に於て現實を越えて制作が可能であるのである。私が夢も歴史的世界に於ては實在的といふのは之に由るのである。我々は制作的身體として歴史的世界に於てあるのである。併し私は唯、動搖的なものが現實だといふのではない。何處までも過去未來が現在に同時存在的といふことは、現在といふものが何處までも自己矛盾といふことでなければならぬ。それは絶対に觸れることのできない絶対に觸れて居るといふことでなければならぬ。現實はかゝる絶対矛盾の自己同一として、いつも二者擇一の方向を有つのである。現實はいつも危機の上に立つのである。而して絶対矛盾的に自己自身を形成し行くのである。過去未來が現在に同時存

在的といふのは、ヘラクレートスの所謂再び同じ流に入ることのできない萬物が同時存在的といふことであり、絶對に反するものの自己同一といふことである。物は無限の争から生ずるのである。そこにはいつも生か死があるのである（非連續の連續である）。世界はかゝる自己同一として創造的であり、我々はかゝる世界の要素として制作的であるのである。そこに時間的な我々の作用が、作用を否定するもの、云はゞ空間的なるものから出でて、自己を否定するものを否定するのである。而して否定するものを否定することの可能なるのは、自己が自己を否定するものから出るが故である。故に我々の作用が絶對に我々を否定するもの、即ち現實の底に現實を否定するものから出でて、否定するものを否定すると考へられるかぎり、辯證法的世界の表現的自己形成といふことができる。物自體に觸れると考へられるのである。我々はいつも制作的に物自體に觸れるのである。

私は從來行爲的直觀を説くに當つて、我々が物を作る、作られた物は我々を離れて獨立したものであり、逆に我々を限定する、我々は物の世界から生れると云つた。それは此處に我々は我々を否定するものから出でて、我々を否定するものを否定すると云ふのと同じである。歴史的實在の世界そのものから云へば、歴史的的生命は辯證法的として自己自身を否定することによつて肯定するといふことである。而してそれは歴史的實在の世界が創造的であると云ふことであり、逆に我々が制作

的であり、現實の世界が歴史的身體的といふことでなければならぬ。私は始に我々の身體は働くものであると共に見るものであると云つた。働くことによつて見る、見ることによつて働く。そこに我々の身體といふものがあるのである。故に我々の身體は外から知られるのである。我々の身體的自己は辯證法的自己同一として自己同一なのである。身體といふものがなければ、物を作るといふことは不可能である。我々が身體によつて物を作るといふこと、即ち制作とは、如何なることであるか。我々が生物的生活を營むといふことが既に自然の技術であり、生物的身體の構成といふことが既に自然の制作である。併し我々の身體といふものが機能的と考へられるならば、身體の考へ更に廣められ深められなければならない。藝術家の作品も藝術家の身體の延長である。人はかゝる言を單なる比喻と考へるであらう。併し藝術的作品といふものも、藝術家の恣意によつてできるものではなくして、客觀的に成立するものでなければならぬ。而してそれは社會的・歴史的な客觀的實在として働くものであるのである、制作者そのものに對しても働きかけるものなのである。斯く云ふも、無論私は藝術的作品と生物的身體とを無造作に一つに考へるのではない。身體は内から働くと共に外から見られるものである。かゝる矛盾的自己同一として、自己自身を形作るものがあり、見るものであるのである。兩者はかゝる矛盾的自己同一の相反する方向に於て考へられるものでなければならぬ。制作が否定から出るといふ方向に生物的身體が考へられ、否定を否定する

といふ方向に藝術的作品の如きものが考へられるのである。前者は否定から出でて否定するものを否定するといふ意味に於て自然的と考へられ、後者は之に反し人爲的と考へられる。併し後者もそれが客觀的と考へられるかぎり、否定より出でて否定するものを否定すると考へられねばならない。歴史的世界の自己限定として歴史的自然と考へられねばならない。現實は何處までも決定せられたものでありながら、それは有つたものは現れるといふ意味に於て有つたものであり、現實は現實自身を越えて創造的なる所に眞の現實があるとするならば、前者はその固定の方向に、後者はその創造の方向に考へられるのである。制作に於て、作用は作用を否定するものから出なければならぬ、時間は空間から出なければならぬ。此故にいつも生物的身體が基礎と考へられる。自己自身を限定する現實は何處までも限定せられたものでなければならぬ。而も生命の生命たる所以は、その創造的なるにあるのである、制作的なるにあるのである。而して物理の世界と考へられるものも、主客相互補足的世界の自己形成と考へられるならば、制作とか創造とかいふものを中心として、すべてを一貫する（歴史的自然といふ如き）形成作用を考へることができらであらう。

歴史的事實在の世界を明にするには、我々はその要素的原形ともいふべき制作的身體といふものについて深く考へなければならぬ。我々の身體といふのは働くものたると共に外から見られるものである、物である、器械である。故に我々は身體的存在であるのみならず、身體を道具として有つの

である。抽象的思惟の立場からは、我と物とは何處までも對立するものでなければならぬ。我々の自己が身體的として物であり、逆に我々が身體を道具として有つといふことは矛盾である。我々の身體的自己是矛盾の統一としてあるのである。併し我々の身體的自己といふものは、唯然考へられた統一ではない。働くものであるのである。考へるといふことも働くことである。それは相對立するものの結合ではなくして、矛盾的自己同一であるのである。かゝる矛盾の自己同一として働くといふことは、形作るといふことである。何處までも相反する時間空間の自己同一的なものは、自ら形作るものである。併し單に自ら形作るといふだけでは、尙生物的生命たるに過ぎない。それが歴史的形成作用的であるには、人間の身體的であるには、見ることが働くことであり、働くことが見ることではなければならない。生物的生命でも、何處までも相反するものの自己同一と考へなければならぬが、それは尙眞に矛盾の自己同一ではない。その同一は尙主語的である、矛盾の自己同一ではなくして、單なる自己同一を脱せない。直接的と考へられる所以である。時間と空間とが尙絕對對立ではない。作用が絕對に作用を否定するものから起るのではない。故に又絕對に自己を否定するものを否定するのでもない。絕對に相反するもの(時と空間、主と客といふ如き)の相互補足の世界の自己限定ではない。尙外的自然の自己限定たるを免れない。之に反し、見られるものは何處までも我々の行爲を否定するものでなければならない。我々はそこに絕對に受働的であれば

ならない。それが行爲的に見るといふことである。それを越えて全然見ることのできない物自體の如きものを考へても、それは唯抽象的概念たるに過ぎない。自己の生物的身體は自己の作用に對立するものではない、即ち自己の作用を否定するものではない、故に見られるものではない。我々は内から自己の身體を見ることはできない。生物的生命には、見ると云ふことはない。見るといふことは絶對否定の肯定である。我々の行爲的直觀の身體的作用といふのは、かゝる絶對に我々の行爲を否定するものから起るのである。而して否定するものを否定する。故にそれは制作的として絶對辯證法的であり、絶對辯證法的世界の自己限定といふことができる。絶對に相反する主觀客觀の相互補足の世界の自己限定として我々の行爲は表現作用的であり、絶對に否定するものを否定する、即ち絶對否定の肯定として、歴史的自然的形成と考へられるかぎり、我々は（創造的世界の創造的要素として）行爲的直觀的に物を見るのである。我々はそこに物自體に觸れるのである。我々の身體はかゝる辯證法的自己同一として、働くものであると共に見るものである。人間の身體は絶對否定の肯定の歴史的生命的創造として、我々が制作的に物を見るといふことは、實在が自己自身を見ることである。藝術の作品から物理學の數學的形式までも、皆かゝる性質のものでなければならぬ。無論、無造作に後者を前者と同一視するのではないが、物理的實驗といふものも我々の身體から出立せなければならぬ。器械は我々の身體の延長でなければならぬ。私が此處に身體といふのは、

單に生物的身體を意味するのではない。機能的には、我々の身體はロゴスのでもなければならぬ。主客相互補足的物理的知識の客觀性も、此に求められなければならない。

絶對の否定から起つて、否定するものを否定することによつて、云はゞ物自體を見るといふことは、我々の作用が、唯、無から起るといふことではない、單なる否定から起るといふことではない。現在は何處までも形作られたもの、決定せられたものでなければならぬ。現在に現れるものは何處までも既に有つたものでなければならぬ。そこには我々の作用は絶對に否定せられなければならない、そこから我々の作用の起り様はない、機械的因果あるのみである。然るに現在には過去未來が同時存在的であり、現在は現在自身を越えて動くものである。而も現在から現在へ動き行くのである。單に固定せられたものは實在ではない、實在は自ら動くものでなければならぬ。現在は絶對矛盾の自己同一として、現在に於てあるものは歴史的生命の創造であり、制作であり、歴史的な然として形作られたものでありながら、何處までも自己自身を否定して動き行くものでなければならぬ。行爲的直觀の立場からは、現實は斯く考へられねばならない。抽象的主觀の立場に立つもののみ、現實は唯固定せるものと考へるのである。私が我々の作用が絶對に我々を否定するものから起るといふのは、現實自身のかゝる絶對的自己否定を意味するのである。現實は何處までも決

定められたものであると共に、何處までも自己自身を否定するものである。それが現實である。かゝる現實の自己矛盾から、我々の作用が生起するのである。そこに人間といふものがあるのである。生物的生命といふものが既に現實の自己否定から起るのである。過去未來が現在に同時存在する現實は、自己矛盾的に自己自身を形成し行く。そこに現在が過去未來を含んで、世界が合目的と考へられる。生物の身體的作用とは、斯く現實が合目的的に自己自身を形成し行く形成作用である。そこに種の生命といふものがある。私は物質的世界を無視するものではない。現實が何處までも固定せられたものであり、決定せられたものであるといふことは、それが何處までも物質的といふことである。實在は物質的でなければならぬ。併し歴史的世界は何處までも、自ら動くものでなければならぬ、物質は辯證法的物質でなければならぬ。それが何處までも直線的なる時そのものを、性質として有つと考へられる時、それは種的形成的でなければならぬのである。自己自身を限定する現實は、生物的生命の世界でなければならぬ。生物的生命の自己形成を中心として、その否定の方向即ち物質的方向は環境と考へられる。普通には生命といふものを環境から抽象して考へるが、直線的なるものと圓環的なるものとの辯證法的自己同一として具體的生命といふものがあるのである、即ち辯證法的一般者の自己限定として生命といふものが成立するのである。形相と質料との關係もいつも、かゝる矛盾の自己同一の立場から考へられねばならぬ。形相と質料とは何

處までも相反するものである。併しそれが矛盾の自己同一として具體的に結合して居るから、その相反する兩方向に、形相が形相であり、質料が質料であるのである。

現實は何處までも決定せられたものであり、現れるものは既に有つたものでなければならぬ。一面に何處までも自己自身を否定する所に、現實の現實たる所以のものがある。併しそれが辯證法的自己同一として自ら動くとき考へられる時、それは右に云つた如く生物的生命的でなければならぬ。歴史の世界は先づ生物的生命的の世界でなければならぬ。併し單なる生物的生命的の世界から我々の行爲は生れるのではない。我々の行爲は現實の絶對否定の底から起るのである、絶對否定の肯定でなければならぬ。それは現實を無視するといふことではない、抽象的に現實を越えるといふことではない。單なる意識から行爲することはできない。それは現實が現實を否定する立場でなければならぬ、現實の自身の否定でなければならぬ。生命の生起には外界的條件といふものがなければならぬ。生命といふものが無條件に成立するのではない。即ち環境といふものがなければならぬのである。それは何處までも決定せられた現實でなければならぬ。故に生物的ならざる我々の生命といふものはない。而して生物的身體の成立は、又何處までも物質の法則に従はなければならぬ。そこには何處までも因果の鐵則が支配せなければならぬ。然らざれば、我々の生命は非現實的である。併し單に環境といふものから生命は出て來ない。環境といふのは、現實

の自己否定の方向である。環境から生命が出ると云ふには、環境そのものが歴史的に出来て来たものと考へられねばならない。自然科学者は物質の無限なる運動の結果、或形成状態に於て生物的生命といふものができ、更に幾億年かの生物發展の後人間が出て來たと云ふであらう。私はその事實を認めないのではない。併し現實に現れるものが、すべて既に有つたものであり、すべてが機械的因果の結果とは考へない。機械的物質の世界といふのも、歴史的實在の世界の一段階でなければならぬ、主客相互補足の世界の自己形成でなければならぬ。物自體は辯證法的自己同一として無限の動でなければならぬ。そこに些にても單に固定したものがあれば、それは死物である。辯證法的世界に於ては永遠の法則はないと考へられるのも、之に由るのである。自然と歴史とを一つに見るのは、かゝる立場からでなければならぬ。

何處までも動き行くものであると共に、何處までも固定的なる辯證法的自己同一の世界は、表現的に自己自身を限定する世界即ち表現的自己形成の世界でなければならぬ。自然と歴史とを連續的な一つの實在として考へ得るのは、かゝる立場からでなければならぬ。從來表現作用といふことは、唯主觀の立場からのみ考へられた。その故にかゝる語を用ゐるのは、世界を主觀的と考へるかに解せられるのであるが、何處までも動くものであつて、而も自己自身を固定するものの自己限定は、斯く云ふ外ないのである。今日の物理學では、從來の物理學の如く所謂外界といふものを考

へるのでなく、物理的法則の世界を主客相互補足的な辯證法的世界の不變的な自己形成と考へるのではないかと思ふ。而してそれは毫も現象の不變的關係としての因果律を否定することではなく、却つて古典的物理学よりも尙一層美しき體系であると云はれるのである。私は物理学について何事をも言ひ得ないが、自然科学の根柢たる物理学が、物理学自身の立場からかゝる根本概念の變更に達したことを驚かざるを得ない。歴史と自然とを一つの連続として見るには、制作といふことを中心として考へなければならぬ。今日の物理学的實驗といふものも、歴史的自然的制作の結果として此處に至つたのである。而もそれは物理的世界を非實在的と考へることではなくして、それは實在そのものの客觀的な自己顯現でなければならぬ。例へば、身體といふのは生命の形作つたものである制作である。併し又形作られた身體の外に生命といふものがあるのではない。生命の本質といふものが他にあるのではない。而して生物的生命は單に形成的と考へられるが、人間の生命に於ては表現作用的に自己自身を形成するのである。そこにそれが絶對に動的なものの自己限定といふことができるのである。生物的生命といふものも現實の否定の否定から起るものと考へなければならぬのであるが、その背後にはいつも固定せられたものが考へられるのである。絶對に動くもの、自己限定ではない。故に生物的生命は、唯、合目的と考へられる。生物的身體は尙自然物と考へられる。之に反し我々の生命は制作的でなければならぬ。我々の身體は道具を有つたものでなけ

ればならない。物は何處までも我に對立するものである、何處までも我を否定するものである。併し相反するものの自己同一として我々の身體といふものがあるのである。我々の身體が道具を有つといふことは、外に物を作ることではなければならない。作られたものは物として獨立したものであり、逆に我々に對して働くものであるが、而も我々は斯く外に物を作ることによつて見るのである。表現作用的として我々の身體といふものがあるのである。嚮に藝術的作品が藝術家の身體の延長と云つたのも之に由るのである。それは物と我とを無媒介的に一つと考へることではなく、逆にそれは辯證法的自己同一と考へることである。我々の身體的生命的成立の根柢には、現實の絶對否定の否定といふものがなければならない（そこに絶對に觸れることのできないものに觸れてゐなければならぬ）。絶對に動くものの自己形成、歴史的生命の制作として、我々の身體といふものがあるのである。物自體の世界は、我々の身體的制作的立場から捉へられなければならない。それは世界を主觀から見るのではなくして、却つてその逆である。單なる意識の立場からは、何物も作ることはできない、唯夢みるのみである。

右の如く辯證法的自己同一の歴史的實在の世界が表現的に自己自身を形成するといふことは、世界を非科學的に考へるといふことではない、多くの人が考へる如き意味に於て藝術的と考へることではない。却つて何等の獨斷なく極めて實證的に世界を見ることである。世界が表現作用的だとい

ふのは、世界の根柢に精神を考へるのではない。現實は何處までも固定せられたものでなければならぬ。現れるものは有つたものでなければならぬ。今日の如き制作的人間の生れ出るには、無限なる過去の歴史的發展が必然の條件でなければならぬ。そこには何處までも科學的因果の法則を認めなければならぬ。現實は何處までも科學的でなければならぬ。我々は物質の法則に従はないで指一本も動かすことはできないのである。我々が物を作るといふこと、制作といふことは、何處までも物の法則に従ふといふことでなければならぬ。加之、我々の制作の基となる我々の身體といふものも、生物進化の法則に従つて發展し來つたものでなければならぬ。そこには寸毫も我々の主觀を入るべき餘地はない。現實が否定の肯定と考へられる時、それは嚮にも云つた如く生物的生命的でなければならぬ、即ち種的でなければならぬ。我々の制作には、何處までも種的身體が基礎とならなければならぬ。世界が自己形成的なる時、それは種的でなければならぬ。併し現實は何處までも矛盾的自己同一でなければならぬ。此故に觸れることのできない絶對に觸れると考へられるのである。現實の否定の否定たる歴史的實在の世界は、單に形成的ではなくして、表現的形成的でなければならぬ、單に種的ではなくして社會的でなければならぬ（表現的形成的といふものなくして社會といふものはないのである）。絶對に動的なるものの自己限定として歴史的實在の世界即ち創造的世界は、表現的形成的の世界にまで發展し來らなければならぬ。物質界、

生物界、歴史的世界と相異なる世界の重疊ではなくして、辯證法的に自己同一的な一つの世界の發展の段階でなければならぬ。それは唯連續といふのではなく、絶對否定の肯定として、いつも前者が後者の必然的條件となるのである。辯證法的生成といふのは何處までも相否定するものの相互否定として、即ち矛盾的自己同一として、物が生ずることである。時間的なるものと空間的なるもの、生命と物質とは何處までも結び附かないものである。而も辯證法的自己同一として物が形成せられるのである（故に限定するものなき限定、無の自己限定といふ）。かゝる辯證法的自己同一の世界は、形作るものと形作られるものとの對立の世界である、云はゞ形と質料との對立の世界であり、人間が環境を作ると考へられる如く、世界が世界自身を辯證法的に形成して行くのである。抽象的思惟の立場に於ては、形と質料とは單に結合せないものと考へられるであらう。併し辯證法的論理の立場に於ては、それは辯證法的繫辭（行爲的直觀）の兩端でなければならぬ。兩者が無差別的に一となることではなく、自己矛盾的な生命の現れること、生きた物が生れることでなければならぬ。環境が人間を作り人間が環境を作る、それが私の現在が現在自身を限定するといふことである。現實は何處までも固定せられたものでなければならぬ。その方向に於て、それは何處までも環境である。併し現實は何處までも自己否定的であり、自己を越えて自己を限定し行く。この

方向に於てそれは主體的である。主體が環境に對し、環境が主體に對し、環境が主體を作り、主體が環境を作る。かゝる辯證法的自己同一として現實といふものがあるのである。抽象的思惟の立場からは、唯かゝる相互限定といふものだけが考へられて、その自己同一といふものが考へられない。併しかゝる自己同一が歴史の世界を決定し行くものである。ランケの云ふ如く、形作られたものと形作るものとが聯關を構成する、この聯關は客觀的に決定せられたものである。かゝる聯關即ちエボツヘが歴史の世界を決定して行くのである。エボツヘといふのは、認識論者の考へる如く了解の對象ではなくして、辯證法的に歴史を決定し行く力でなければならぬ。それは單に環境といふものでもなく、主體といふものでもない。然らばと云つて、二者の相互關係といふ如きものでもない。環境が人間を作り、人間が環境を作る。主體を離れて環境といふものがあるのではなく、環境を離れて主體といふものがあるのではない。時代の動きは、主體を變ずると共に環境といふものを變ずるのである。斯く云ふのは、主體と環境とを唯相對的に考へるのではない。主體と環境とは、時間と空間との如く絶對に相反するものでなければならぬ、抽象的思惟の立場からは、何處までも獨立のと考へられるものでなければならぬ。而も時間・空間的に物が生ずる如く、主體的・客體的に物が生ずるのである。かゝる辯證法的生成の段階が時代といふものである。對象論理の立場の上に立つ人は、具體的なるものを對立的概念に分析し、斯くして考へられたものを獨立の實在で

あるかに考へ、兩者の相互關係によつて具體的なものを再生しようとする。故に具體的なものは、唯、思惟的過程の結果として考へられるのであつて、その出立點となるのではない。さういふ立場からは、時代といふものは唯了解の對象と考へられるだけである。併し時代といふのは、我々の實踐の段階でなければならぬ。過去の歴史的段階、又は全く自己と關係のない世界は、單に了解の對象といふ如きものであらう。併し自己といふものが抽象的にあるのでなく、自己は歴史の或段階に於てあるものでなければならぬ。考へるといふことも、その段階に於て考へるのである。いつも具體的な行爲の直觀の現實が立點となるのである。

物質的世界の無限なる進展の結果、或時期に於て生物が発生したと考へられる。併しそれは生命といふものが機械的に出來るといふことではない。或物質的結合の状態が生物的生命の發生に必要な條件であつたと云ふことである。生命の發生と否とに關せず、物質は何處までも物質自身の法則に従つて動き行くのである。然らばと云つて、或物質的條件と生命との關係が偶然だと云ふのではない。その間に必然的關係がなければならぬ。環境が主體を作り、主體が環境を作るのである。そこには辯證法的自己同一として歴史的自然的形成がなければならぬ。生物に對しては、外界は食物的であり、性慾的である。而して今日の我々の生命といふものも、かゝる生命から發展し來つたものである。我々の生活が如何に文化的と云つても此立場を離れることはできない。之を離れる

ば、我々の生命は非現實的である。併し是故に人間の生命が單に生物的生命の派生だと云ふのではない。環境が主體を作り主體が環境を作るといふ絶對辯證法的世界の自己同一の立場に於て、主體なるものが人間なのである。制作といふことを中心として歴史といふものを考へるならば、ドイッテ・イデオロギーに於て云つて居る如く何れの段階に於ても、何等かの意味に於て、歴史的に形成せられたものが既に存在して居り、それ等のものは各々の世代にその先行者から傳へられるのであつて、それ等のものは一方では新しい世代によつて改變せられはするが、併し他方では又新しい世代に對して、それ自身の生活諸條件を指定し、而して新しい世代に一定の發展を、一の特種な性格を與へる、即ち人間が環境を作ると同様に環境が人間を作ると云ふことでなければならぬ。いつでも既に形作られたものが形作るものの基礎となるのである。前のものが後のものに方向を與へるのである。併し歴史に於ては、何處まで遡つても既に形作られたものであるのである。單に與へられたものと云ふものがあるのではない。何處までも既に作られたものが作るもの原因となるのでなければならぬ。故に歴史的實在の運動は表現作用である。歴史的發展の過程はいつも作られたものから作るものへである。機械的にも考へられない、合目的にも考へられない。單に環境的(空間的)でもない、單に主體的(時間的)でもない。歴史的世界の始といふものはない。物質の世界と考へられるものも、既に歴史的に形作られたものでなければならぬ。唯、それは何處まで

も環境的なるが故に、すべての原因、否、先行的條件と考へられるのである。我々が表現作用的に物を作るといふことも、既に形作られたものから出立せなければならぬ。それぞれの時代に於て何處までも客觀的に形作られたものの指示する方向に形作ることによつて、客觀的表現が成立するのである。表現作用といふことは環境が主體を、主體が環境を作る、作られたものが作るものの必然的條件となるといふことであり、我々が表現作用的に物を作るといふことは、かゝる世界の自己限定として可能なのである。然るに多くの人は之を逆に考へて居るのである。

歴史的實在の世界に於ては、環境が主體を限定し、主體が環境を限定する。而も歴史的實在の根柢は、云はゞ歴史的實體は單に主體的でもなく、單に環境的でもない、又兩者の相互限定でもない。いづれの時代に於ても、作られたものがあるのである。而もそれは絶対に固定することのできないもの、絶対に動的なるものの固定せられたものとして、形作られたものである。故にその世界はいつも自己矛盾を含んで居るのである。固定すればする程、自己矛盾に陥るのである。前の時代の自己矛盾が既に次の時代を含んで居るのである。かゝる歴史的發展の本質は人間出現の以前にも遡らなければならぬ。此故に人間といふものが此世界に生れて來たのである。それは世界を主觀的に考へることではなくして、逆に人間を客觀的に考へることである。今日の科學によれば、人間發生以前、否、生物發生の以前に單に物質的運動の世界があつたと考へる。併しさういふ世界が

ら今日の如き歴史の世界に發展して來たと云ふには、それは既に環境が主體を作り主體が環境を作るといふ如き制作的世界でなければならぬ。單に機械的因果の世界から生命は出て來ない。科學中の科學ともいふべき物理學が、近來兎に角單なる機械論の立場を脱したではないか。今日の我々の制作といふものも、歴史的現實の自己矛盾より起る歴史的主體の形成作用でなければならぬ。今日の科學といふものも、今日の歴史的發展の段階に於ける歴史的實在の自己表現に外ならぬ。

歴史に於てあるものは、いつも形作られたものである。生物發生以前の自然といへども、形作られたものでなければならぬ。歴史には始といふものはない。いつも世代である。而も矛盾的自己同一として世代から世代へ行く。而して世代から世代へ行くといふことは、唯、時代が變つて行くといふことではない。一つの歴史的世代も内に自己矛盾を含み必然的に動き行くのである。それは環境が主體を作り主體が環境を作る歴史的實踐の段階でなければならぬ。世代といふのは、意識的立場から考へられる如く了解の對象ではなくして、行爲的直觀的に見られる我々の實踐の段階でなければならぬ。無限の過去未來が現在に同時存在的である、現在はいつても矛盾的自己同一である。現實は現實から現實を越えて現實に移つて行く。併しそれは唯、同位的現實へ動いて行くこと云ふのではない。各の世代はいつても既に形作られたものの上に立つ。我々は各の世代に於て、既に決

定せられたもの、如何ともすることのできないものを見出す。現在は何處までも決定せられたものである。かゝる決定せられたものが條件として、次の世代が形作られて行くのである。そこに歴史の絶對的客觀性があるのである。そこを永遠の今の自己限定とか、觸れることのできない絶對に觸れるとか云ふのである。

現實は固定したものである、形を有つたものである。併しそれは單に固定したものと云ふのではなくして、形作られたものである。單に固定したものは現實でない。現實が何處までも形作られたものであると云ふことは、現實は何處までも否定せらるべきものであると云ふことである、現在に現れるものは既に有つたものであり、現在は單なる結果としてそれ自身の獨自性を有たないと云ふことである。それが現實の自己否定の方向である。かゝる方向に於て、歴史的實在界は何處までも物質的である。具體的實在は何處までも物質的でなければならぬ。併し實在は自ら形作るものではない。併し實在は自ら形作るものではない。既に有つたと云ふも、それは現實に現れるといふ意義に於て有つたのである。現在の矛盾的自己同一から過去未來といふものがあるのである。かゝる現實の自己否定の否定に於ては、現實は歴史的身體的である。現實の自己形成即ち現實の自己否定の否定は、何處までも段階的に或固定せるものの否定の否定として生物的身體的である。それは種の世界である。併し歴史的現實は絶對の矛盾的自己同一でなければならぬ。それは何處までも形作られたもの、固定せられ

たものであると共に、何處までも否定の否定として自己自身を肯定するものでなければならぬ。歴史の身體は何處までも生物的であると共に制作的である。環境が人間を作り人間が環境を作ると云ふことは、世界が制作的であると云ふことである。而してそれは歴史の實在の本質でなければならぬ。それは歴史の始から意識があるといふことではなく、歴史の實在の世界が右の如きものなるが故に、意識作用といふものが出て來ると云ふことである。

嚮に私は我々が制作すると云ふことは、絶對に我々の作用を否定するものから出でて、我々の作用を否定するものを否定することであると云つた。併し歴史の進行そのものが、何處までも決定せられた現實の絶對否定の否定なのである。それは歴史的世界を可能的と考へることではなく、歴史的現實は段階的に何處までも決定せられたものと考へることである。現在に過去未來が同時存在的といふのは、過去と未來とが取換へ得ると云ふことではない。矛盾的自己同一として、行爲的直觀的に、制作的に、方向が定つて居るのである。何處までも現在の實踐的段階が基礎となつて行くのである。生物の本能作用も現實の否定の否定である。併しそれは眞の否定の否定ではない、眞に制作的ではない。唯、人間發生に至つて、歴史的現實は絶對否定の否定である。單に形成するのでなく、表現的に形成するのである。時間と空間、主と客とは絶對に相反するものでありながら、現實は矛盾的自己同一として、作られたものが自己矛盾的に作るものを作つて行く（そこに始めて歴史

的段階といふものがある。故に現實は何處までも決定せられたものでありながら、いつも動搖的である。歴史の人間の段階に於て意識といふものが出て來るのである。それは否定の否定として、歴史的世界に於て制作の性質を有つたものである。

自己形成的な、制作的な歴史的现实は、いつも動搖的である。歴史的现实はいつも危機の上に立つて居ると云つてよい。矛盾的自己同一とは此の如きものでなければならぬ。我々が絶対に觸れることのできない絶対に觸れるといふことは、自己矛盾である。併し人間の存在はかゝる自己矛盾の上に成立して居るのである。人間はかゝる矛盾的自己同一の世界の要素なるが故に、見ることに働くこととは何處までも相反するものでありながら、制作的に一つである。我々の身體的自己に於ては、働くことが見ることであり、見ることが働くことである。歴史的现实は行爲的直觀的に、制作的に動搖的なのである。歴史的现实に於ては、いつも現在に過去未來が同時存在するのである。現在は自己矛盾的に無限の過去未來を含む。故に現實は自己矛盾的に自己を越えて進む。歴史的世界は現實から現實へと自己自身を形成し行く。そこに觸れることのできない絶対に觸れると云ふことができる。我々の制作は、何處までも段階的に決定せられた現實を何處までも否定する立場から出て、否定するものを否定すると考へられるかぎり、歴史的自然であり(合理的であり)、歴史的现实が表現的に自己自身を形成すると云ふことができる。そこに眞といふものがあるのである。その否

定の否定といふことは何處までも現實を離れることでなく、いつも現實からでなければならぬ。然らざれば、知識は抽象的たるを免れない。

## 五

以上述べた如き立場から認識論の諸問題は如何に考へられるであらうか。此論文に於ては、さういふ問題に入ることはできなかつた。唯、從來の認識論の如く認識の立場を歴史的世界の外に置くのではなく、之をその内に求めるならば、何處にそれを求めねばならないかについて、考へて見ただけである。以上述べた如き立場から、認識論の諸問題を考へ直すことは大きな仕事であらう。併し我々は今後かゝる立場から考へ直して見なければならぬと思ふのである。從來の認識論は判斷的論理の立場から認識の諸問題を考へた。無論、認識といふには判斷の形式を具してゐなければならぬ。併し抽象的な概念的知識といふのは、歴史的発展の或段階に於て生れ來つたのである。前者から後者を捉へるのでなく、却つて後者に於て前者が捉へられなければならない。それは歴史的生命の辯證法的論理、行爲的直觀の一面として理解せられなければならない。生命といへば、すぐ非合理的と考へ、表現といへば單に了解の對象と考へるのは、自己といふものを歴史の外に置いて考へる故である、抽象的立場の上に立つからである、ヘーゲルの現象學の如きも、行爲的直觀の立場に

於て理解し得ると思ふ。相反するものの中に媒介的なるものを置き、唯當爲といふ如きものによつて結合するのは、意識的自己の立場を脱したのではない。

現實は何處までも決定したものである。併し現實は辯證法的自己同一として、現在に無限の過去未來が同時存在的である。現實は何處までも決定せられたものたると共に、何處までも自己否定を含み、自己自身を越えて現實から現實へ動いて行く(即ち制作的に連續して行く)。歴史的现实が何處までも自己否定を含むと云ふことから、意識的自己の立場といふものが成立する。我々は現實の段階に即しながら、現實を越えて無限の過去未來を同時存在的に見るのである。そこに對象論理の立場といふものがあり、所謂認識對象界といふものが考へられる。私は行爲的直觀の立場といふのは、かゝる立場を無視するのではなく、現實は何處までも自己否定を含まなければならない、自己否定を含まないものは現實でないと云ふのであるから、それは辯證法的一面として含まれてゐなければならない。歴史的现实は絶對の矛盾的自己同一として、いつも危機の上に立つ。現在が自己矛盾的に無限の過去未來を含み、永遠の今の自己限定として見らるれば見られる程、それは二者擇一の立場に立つのである。死か生かの立場に立つのである。現實は無限の過去より發展し來れる歴史的现实の段階として、世界歴史的に(絶對辯證法的に)方向を有つ。併し現實は單に決定せられたものではなく、否定の否定として、必然の側に自由がある。現實の絶對辯證法的に自己自身を形成し行く方向

が理性である。かゝる意味に於て行爲的直觀は理性的でなければならぬ。歴史的現實に於ては、環境が主體を作り、主體が環境を作る。併し唯、環境が歴史を作つて行くのでもなく、主體が歴史を作つて行くのでもない。矛盾的自己同一として制作的に動き行くのである、即ち表現的に形成し行くのである。生物的時代に於ては世界は單に衝動的であり、生物的身體的に自己自身を形成し行く。人間の世界に於ては世界は理性的であり、表現的に自己自身を形成し行く、即ち歴史的身體的に自己自身を形成し行くのである。判斷作用といふものは表現的世界の自己限定として成立するのである。

世界がその根柢に於て矛盾的自己同一であり、現實が自己否定の否定として動き行くと考へる時、環境は表現的であり、主體は人間的である。我々は歴史的身體的に生れ、我々は歴史的身體的として道具を有つ。否定の否定として、何處までも現實が現實を越えるといふ立場に於て、我々は何處までも意識的であり、行爲は單に意識作用的である。そこに歴史的現實に即して單なる意識の世界、志向的對象の世界といふものも成立する。物は名を有つものであり、世界は名の世界である。かゝる世界の自己限定と考へられるものが、所謂抽象論理の形式である。併し私は抽象論理を輕視するものではない。現實はその否定の否定に於て抽象論理的でもなければならぬのである。唯抽象論理の立場から具體的論理に入らうとすることに反對するのである。それは逆でなければなら

ない。對象論理の矛盾を媒介として辯證法を考へるのでなく、そこには立場の逆轉がなければならぬ。

意識の立場といふのは、現在に即しながら、何處までも過去未來を同時存在的に見る立場である、現實の否定の否定の立場である。歴史的現實に於ては、いつも現實の自己限定を中心として、過去未來を含んだ抽象的一般者の世界が考へられる。それが一般妥當的知識の世界である。我々の歴史的身體から、制作的性質を除去したものが意識一般である。或は行爲的直觀から直觀を極小としたものと云つてもよい。行爲的直觀は矛盾的自己同一として、相反する兩方向に極限を有つ、時間的方向と空間的方向とに。それによつて歴史的認識と自然科学的認識とが成立する。併し表現的に自己自身を形成する世界が、自己自身の形成を越えると考へられる時、それを表現的一般者の世界と考へることもできるであらう。而してそれに於て、一方に判斷的一般者といふ如きものが考へられ、一方に自覺的一般者といふ如きものが考へられる。行爲的直觀的に見られる現實を主語として相反する兩方向に述語的世界が成立するのである。行爲的直觀の現實からは、一つは過ぎ去つた過去の世界、一つは何處までも繰返されると考へられる手段の世界であるのである。而してその何れからも當爲は出て來ない。當爲は現實の行爲的直觀から出て來なければならぬ、制作から出て來な

ればならない。自己がその中に居る世界の自己限定として、辯證法的に我々は如何に爲すべきかを  
 知るのである。然らざれば、唯形式的當爲たるに過ぎない。

形式論理的に考へれば、個物的なるものと一般的なるものとの中間に特殊的なるものが考へられ、特殊なものもが具體的と考へられる。現實に於てあるものは特殊なものもと考へられる。併し歴史的生命の辯證法に於ては(辯證法的一般者の自己限定としては)、現實的なるものは個性的なものでなければならぬ。環境が主體を作り、主體が環境を作り、形作られたものから形作られたものに行く、制作から制作に行く世界の自己限定は個性的でなければならぬ。歴史的现实とは主體と環境との相互限定の世界である。併し世界は單に兩者の相互限定ではない、世界はそれ自身の自己同一性を有ち、世代から世代へ行く。歴史的にある物は、單に環境的に出來たものでもなく、單に主體的に作られたものでもない。然らばと云つて、單に兩者の結合でもない。物はそれ自身の個性を有つのである(歴史の物は個體的でなければならぬ)。物を作るには、主體的なものが働かねばならない。併し出來た物は環境によつて限定せられたものでなければならぬ。加之、現實に働く主體的なものは、既に前の環境によつて限定せられたものでなければならぬ。併し前の環境といふものは、又その時の主體的なものによつて作られたものでなければならぬ。歴史的现实に於

て物が出來ると云ふのは、辯證法的自己同一としての私の所謂歴史的自然によるのである（世界的技術によるのである）。かゝる矛盾的自己同一といふものが個性的といふものである。我々はここに行爲によつて物を見る。私が行爲的直觀的に物を見る所に世代があると云ふ所以である。歴史的現實に於ては、環境と主體とは何處までも相對立する。併し歴史的現實に於ては、與へられたものは單に與へられたものではない、作られたものである。而して作られたものが基となつて、作つて行くのである、歴史は自己自身を變じて行くのである。主體的なるものは、現實の自己矛盾より生ずるのである。與へられたものが作られたものだといふ時、そこに自己矛盾的に主體的なるものが含まれて居るのである。かゝる矛盾的自己同一が個性といふものである。個性といへば又了解の對象と考へられるかも知らぬが、右の如く考へるならば、個性とは歴史を決定し行く根柢的な力でなければならぬ。制作を中心として段階的と考へる時、歴史的現實は個性的でなければならぬ。歴史的に現實的なものは、特殊的ではなくして、個性的でなければならぬ。

現實に於ては、いつも環境と主體とが對立し、環境が主體を限定し、主體が環境を限定する。現實は繰返すことのできない無限の過去から形作られたものとして、何處までも決定せられたものだと共に、現實は現實を越えて行く。現實は矛盾の自己同一として、その何處までも決定せられたものといふ方向に於て環境的であり、その自己自身を越えて行くといふ方向に於て主體的である。

現實は何處までも決定せられたものである、現れるものは既に有つたものであると云つてしまへば、現實といふものはなくなる。現實は自己否定の否定として辯證法的自己同一でなければならぬ。現實は自己否定の否定として形成的である。現實が何處までも決定せられたものでありながら、否定の否定として、それが自己形成的であるといふ時、上に云つた如くそれは生物的生命の世界である、種の世界である。現實の世界の自己限定が右の如き意味に於て否定面即肯定面と云ひ得るならば（即といふ矛盾的自己同一の意味に於て）、生物的生命といふのはその否定面的自己限定と云ひ得るであらう「論理と生命」の始に云つた如く）。現實の世界に於て、環境に對立し主體的に働くものは、種なるものである。環境が主體を限定し主體が環境を限定すると云ふだけの現實の世界は、生物的生命の世界でなければならぬ。然るに歴史的現實は絶對の矛盾的自己同一でなければならぬ（絶對無の自己限定の世界でなければならぬ）。此故に歴史的現實に於ては、現在に無限の過去未來が同時存在するのである。現實は動搖的である、現實は無限の方向を有つて居る。而もそれは單に現實が動搖的とか無方向的とか云ふことではない、過去と未來とが現實に於て取換へ得るなどと云ふことではない。現實は制作を中心として段階的に決定的方向を有つて居るのである、形作られた現實の段階を基として進み行く方向を有つて居るのである。そこに現實の唯一性があるのである。然らざれば矛盾的自己同一といふものではない。

制作を中心として、環境が主體を限定し、主體が環境を限定する。而して歴史に於ては、單に與へられたものと云ふものはない。歴史的に實在するものは、最始より既に形作られたものである。所謂自然といふも、既に形作られたものである。自然と歴史との連続は斯くして考へられなければならない。斯く考へるならば、歴史は制作から制作に行くと言ふことができる。制作とは（歴史的・自然として）矛盾的自己同一作用といふことができる。環境が主體を限定するといふ方からは、歴史的世界の進行は物質的である、一般法則的である。主體が環境を限定するといふ方からは、それは生物的・生命的である、種的形成である。併し主體が環境を作るのみならず環境が主體を作る、歴史に於ては、單に與へられたものと云ふものなく、形作られたものから形作られたものに行く、歴史的世界は制作的に自己自身を限定すると云ふ時、歴史的世界は個性的でなければならぬ。自己自身を限定する主體的なるものを生む創造的世界は、自己自身を個性的に限定する世界でなければならぬ。主體と環境との矛盾的自己同一が、個性的創造といふものである。それが論理的には、私の從來云つた如く、時間即空間、空間即時間、個物的限定即一般的限定、一般的限定即個物的限定として辯證法的な一般者の自己限定といふものである（即といふ語はいつも矛盾的自己同一といふことである）。かゝる世界に於て、始めて眞に具體的な個といふものが現れるのである。主體と環境

との矛盾的自己同一として、個性的に自己自身を限定する世界は、無數なる個と個との相互限定の世界でなければならぬ。是に於て個は主體的な種から生れながらも、逆に種を限定すると云ひ得るのである。併しそれは同時に種が單に生物的種ではなくして、歴史的種であると云ふことである。主體的なるものが社會的であると云ふことである。個性的創造の世界に於て種が單に生物的ではなく、社會的でなければならぬ。個といふのは、主體と環境との相互限定の世界に於て、主體的なるもの、種から生れる。併し個は唯、種の個ではない。主體と環境との矛盾的自己同一として世界が制作的であるといふことは、そこに主體的なる種が否定せられるといふことが含まれなければならない。そこに種から生れながら種を否定する個といふものがあるのである。若し歴史の基體といふものを考へるならば、制作的に自己自身を限定し行く創造的自然とも云ふべきものが、それと考へられねばならない。何處までも單に與へられたものと云ふものなく、形作られたものから形作られたものに行く歴史に於ては、基體が同時に主體でなければならぬ。眞の具體的な個はかゝる意味に於て基體的・主體的でなければならぬ。それは種を無視すると云ふことではない。個は何處までも歴史的に種から生れなければならないのは云ふまでもない。

世界が個性的に自己自身を限定すると云ふことは、歴史的發展の或一段階をその前後から切り離して、抽象的に主客合一といふ如き藝術的自己同一を考へることではない。歴史的現實の矛盾的自

己同一といふものが個性を有つのである。歴史的現實に於ては、無限の過去未來が同時存在である。而もそれは過去と未來とが取換へ得るといふことではなく、現實は何處までも決定せられたものでなければならぬ。矛盾的自己同一として現實は唯一の方向を有つ。そこに現實が個性を有つと云ひ得るのである。現實のかゝる矛盾的自己同一の動向を、個性的に自己自身を限定すると云ふのである。對象認識の立場からは、歴史的生成といふものを擱むことはできない。個性といふ如きことは、唯了解の對象としか考へられない。併し眞の當爲は歴史のかゝる個性的動向に基礎附けられるものでなければならぬ。歴史に於て作られたものが與へられたものである。そして作られたものが與へられたものとして、更に作つて行く。歴史は段階的に動いて行く。そこに歴史の絶對的客觀性がある。併しそれは單に合目的必然ではない。いつも絶對否定的なものに面して居る、云はゞ圓環的なものに觸れて居る。故にその動きは否定の否定と云ふのである。斯く直線的なるものの圓環的限定といふ時、そこに個と個との對立といふことがなければならぬ。私は此論文に於ては、個の問題に觸れなかつた。併し現在が過去未來を含み、矛盾的自己同一として自己自身を限定するといふ時、辯證法的な一般者の自己限定として、無數なる個と個との對立、その相互限定が含まれてゐなければならぬ。それは抽象的に無媒介的にと云ふことでなく、歴史的現實がいつも觸れることのできない絶對に觸れるといふ意味に於て、絶對の矛盾的自己同一を通してでなければならぬ。

い。制作を媒介として個と個とが相對し相限定するのである。

現在に無限の過去未來が同時存在的といふことは、現在は現在として兎に角個性的に固定したものであり、何處までも個性的に自己自身を固定し行く方向を有しながら（云はゞ永遠化して行く方向を有しながら）、種々なる世代が同時存在的であると云ふことである。現在は固定したものでありながら、種々なる傾向を有つて居る。現實は動搖的である。それ等の傾向はいづれも個性的に自己自身を限定して一つの世代を形成する性質を有つたものである。併しそれ等は現在に於て唯、傾向として含まれて居るのである。故に尙世代といふものではない。それ等は現在に於ての種々なる傾向として、自己自身を限定する特殊者といふべきものである。而してそれ等が歴史に於て働くものとして、主體的と考へられるものである。歴史に於ては唯一つの民族といふものはない。いづれも主體的として環境に對し、他の民族に對する。種々なる民族は種々なる傾向の擔ひ手である（民族は歴史的傾向の擔手として歴史的主体ともなるのである）。併し歴史は單に民族の聯關ではない。かゝる聯關の何處かが中心として世界は個性を有つのである。そこに矛盾的自己同一として特殊が一般となるのである。而して特殊が一般であると云ふことは、個物が一般であると云ふことである。辯證法的一般者の自己限定として、特殊が一般であると云ひ得るのである。そこには個が働かねばならない。世代といふのは、個が單に種の個ではなくして、基體的・主體的に働く世界でなければな

らない。單なる種に對しては、環境は單に食物的であるが、個に對しては表現的である。そこに歴史的現實の世界があるのである。個性的世界に於て、種は單なる生物的種ではなくして、人倫的にもなるのである。個性的世界に於ての特殊として種は、自立的に次の世代の中心となる傾向を有しながらも、個性的な現實の世界の特殊として、現實の個性を分有して居るのである。その限りそれは現實の傾向であるのである（「三」に於て生きた種と云つた如く）。此故に現實に於て主體的に働くと云ふのである。現實の個は、種から生れるのみならず、種を通して働かなければならない。

現在は何處までも決定せられたものである。併し現在には自己の中に自己否定を含み、自己を越えて動き行くものである。何處までも空間的になると共に時を含む、合目的であるのである。世界は生物的生命的である、種的に自己自身を形成する世界である。そこにも環境が主體を限定し、主體が環境を限定する。併しそこには尙個といふものはない。併し歴史に於ては、單に與へられたと云ふものはない、與へられたものは作られたものである。物質界といへども、作られたものである。作られたものが作るものを作るのである。作られたものが作るものを作ると云つても、作られたものとして固定せられたもの、そのものから作るものが出ると云ふのでもなく、又作られたものに對立的に考へられる作るもの、即ち主體的なものから作られるものが出ると云ふのでもない。質料が

形相を作るのでもなければ、形相が質料を作ると云ふでもない。現實が自己自身を固定したと云ふことそのことが、自己矛盾であり、そこにいつも自己否定が含まれて居るのである。かゝる現實の自己矛盾から現實を變じ行くものが生れるのである、即ち主體的なものが生れるのである。之を作られたものが作ると云ふのである。生物的生命に於ては、主體と環境とが、相對立し相限定すると云ふも、そこに辯證法的自己同一といふものはない。そこに制作といふものはない。固定せられたものは物質であつて、即ち單に與へられたものであつて、作られたものでない。従つてそれは作るものでない。生物的生命の世界、種の世界に於ては、個もなければ制作もない。主體と云つても、唯、衝動的である、制作的主體でない。矛盾的自己同一から主體的なものが生れるといふことはない。然るに單に與へられたものと云ふものはなく、始から作られたものであり、逆に作られたものが與へられたものであるとも云ふべき歴史的世界に於ては、制作といふものが媒介として考へられる世界である。それは個性的に自己自身を限定する世界、個の働く世界でなければならぬ。個が働くといふことなくして、制作といふものはない。制作の獨自性といふことは、個性といふことでなければならぬ。かゝる世界に於ては環境から主體が生れるのである、質料から形相が作られるのである。制作を媒介とする辯證法的世界に於ては、奴隸が主人となるのである。現實は、現在に過去未來が同時存在的といふ様に、無限の可能を含んで居る。それが現實の特殊である。それ等は

いづれも形相として主體的に働く性質を有つて居る、つまり傾向である。併し現實は唯それ等の綜合ではない。現實はそれ等の否定的肯定であるのである、即ち相反するものの矛盾的自己同一であるのである。此故に現實は個性的であるのである。矛盾的自己同一といふのは、特殊の特色が消されることではなくして、却つて特殊の特色が生かされることである（例へば所謂有機的統一の如くに）。故に現實は特殊の綜合統一ではなくして、逆に矛盾的自己同一な現實の個性的統一によつて生かされるかぎり、特殊が現實の特殊であるのである、生きた特殊であるのである。種は自己自身を否定するものによつて、個によつて生きるものである。個性的に（段階的に）自己自身を限定し行く歴史的世界の傾向として、辯證法的な一般者の特殊として、特殊が自己自身を限定する具體的特殊であるのである。かういふ立場からは、種は歴史的世界に於て生れ、歴史的世界に於て亡び行くものなのである。個性的に自己自身を限定する世界といふのは形相の世界ではない、質料から形相の生れる世界である。作用が補足的の一面たる物理的世界も、かゝる意味に於て個性的に自己自身を限定する世界である。自己自身を形成する世界は、質料が形相を生む世界でなければならぬ。我々は物を作るが、物を作ることによつて我々ができて行くのである。制作を中心として個性的に自己自身を限定する世界は、主體的なものが變じ行き、新たな主體が生れる世界である（經濟的社會に於ての様に）。

何處までも決定せられたものでありながら、矛盾的自己同一として何處までも自己否定を含み、自己自身を越える現實の自己限定の立場に於ては、現實は何處までも論理的である。表現的に自己自身を形成する歴史的現實を廻つて無限なる表現の世界が成立する。行爲は判断となり、直觀的なものを主語として無數に述語的なものが成立する。而して歴史的世界に於ては、單に與へられたものと云ふものなく、作られたものが與へられたものであり、矛盾的自己同一として更に作るものを生んで行く、歴史は段階的であると云ふことから、判断はいつも推論式的である。現實が自己自身を否定する立場に於て、論理的形式が成立するのである。自己自身を限定する現實がいつも一般者と考へられる。形式論理といふものも、我々の歴史的現實の生活に含まれてゐなければならぬ。

斯くの如くにして實在は論理的でなければならぬ。論理の形式は實在の表現的自己限定の形式でなければならぬ。併しそれは論理の形式から具體的實在、歴史的實在を考へるのではない。抽象的立場から具體的なものは擱むことはできない。その逆でなければならぬ。カントのアンチノミーは對象論理の墓標に外ならない。對象論理的矛盾を媒介として具體的論理即ち辯證法的論理に

入るのでなく、そこには立場の轉換がなければならぬ。相對立するものの相互媒介を循環的に考へても、論理そのものの性質は變らない。それから絶對媒介といふものは出て來ない。辯證法的論理に於ては、與へられたものが媒介せられたものであり、媒介せられたものが與へられたものでなければならぬ。單に種といふものが中心とは考へられない。

行爲的直觀といふのは、此論文の始に云つた様に、行爲と直觀とが無差別的に一つとなると云ふことではない、兩者の矛盾的自己同一といふことである。矛盾的自己同一といふことは、物が作られると云ふことである、制作といふことである。制作といふことは、單に合成といふことではなく、歴史的生産である。我々の作用そのものが歴史的身體的なるが故に、我々は制作可能であるのである。歴史的に生れるものは、個性的であり、直觀的である。行爲的直觀的なるものは「所與の範疇」に當嵌つた直覺といふ如きものではなくして、我々の行爲に對して否定的であると共に我々を動かすもの、我々の行爲を惹起するものである（動物には衝動的なものが行爲的直觀的なるものである）。歴史的身體的なる所に我々の生命があり、我々の生命は歴史的身體的生命であるのである。行爲的直觀的なる現實の自己矛盾から、現實が何處までも固定せるものであるといふ方向に直覺的と考へられ、現實が現實自身を越えるといふ方向に行爲的と考へられる。抽象的論理の立場に於ては、一方に單なる直覺的なるものが考へられ、一方に單なる行爲といふものが考へられ、唯、兩者の對立の

み考へられる。併し人生の矛盾は行爲的直觀の現實にあるのである、我々の自己は歴史的身體的であり、我々の身體が制作的なるにあるのである。我々が歴史的现实に於ていつも觸れることのできない絶對に觸れて居るが故である。眞に行爲的直觀的なものは、對象論理の立場から考へられる如く、單に我々に對して立つものではなくして、我々に迫るものである、我々を捉へるものである。我々の自己が自己矛盾的に含まれて居るものが行爲的直觀的なものである。非直觀的と考へられる意識的自己の當爲は、行爲的直觀的な現實の自己矛盾に基くものでなければならぬ。抽象的理性の立場から、形式的當爲の外出て來ない。私は人間の抽象性といふものを輕視するのではない。現實は自己否定を含み、現實は現實を越えるが故に、現實であり、そこに人間は意識的であり、抽象的に物を見、抽象的に働くが故に人間であるのである。併し抽象的意識的自己の立場から具體的實在は擱まれない。抽象はいつも具體に即した抽象でなければならぬ、思惟はいつも行爲的直觀に即した思惟でなければならぬ。私の論じた所は主として立場の問題であつて、さういふ立場から見ての種々なる具體的内容の問題に入つては居ない。併し私は如何なる問題が論せられるかと云ふ前に、それが如何なる立場から論せられるかが問題とせられなければならない。特に今日の如き哲學の危機とも思はれる時代に於ては、それが第一の問題でなければならぬ。我々は各自自己の立場について深く考へて見なければならぬ。